

2023 AC

The 2nd Celebrate Hanukkah

原語で味わう創世記第2章

12/24~31

No.8 29日(朝)

「創世記2章」を学ぶ上で大切な視点

【新改訳2017】イザヤ書34章16節
主の書物を調べて読め。
これらのもののうち、どれも失われていない。
それぞれ自分の伴侶を欠くものはない。
それは、主の口がこれを命じ、
主の御霊がこれらを集めたからである。

※「自分の伴侶」(=雌も雄も)にたとえられているのは、神のことばの証言が必ず伴侶のように置かれているからです。「調べて」は「尋ね求める」の「ダーラシュ」(דָּרָשׁ)、
「読む」は「出会う、見つける、向かい合う」の「カーラー」(קָרָא)です。
そうするなら、必ず「ふさわしい助け手」(自分の伴侶)に出会うのです。主の口(男性形)とそれを集める御霊(女性形)は一对だからです。

「創世記2章」を学ぶ上で大切な視点

【新改訳2017】

イザヤ書 46章10節

わたしは後のことを初めから告げ、
まだなされていないことを昔から告げ、

『わたしの計画は成就し、
わたしの望むことをすべて成し遂げる』という。

①ここには強調するために、パラレリズム修辞法が使われています。

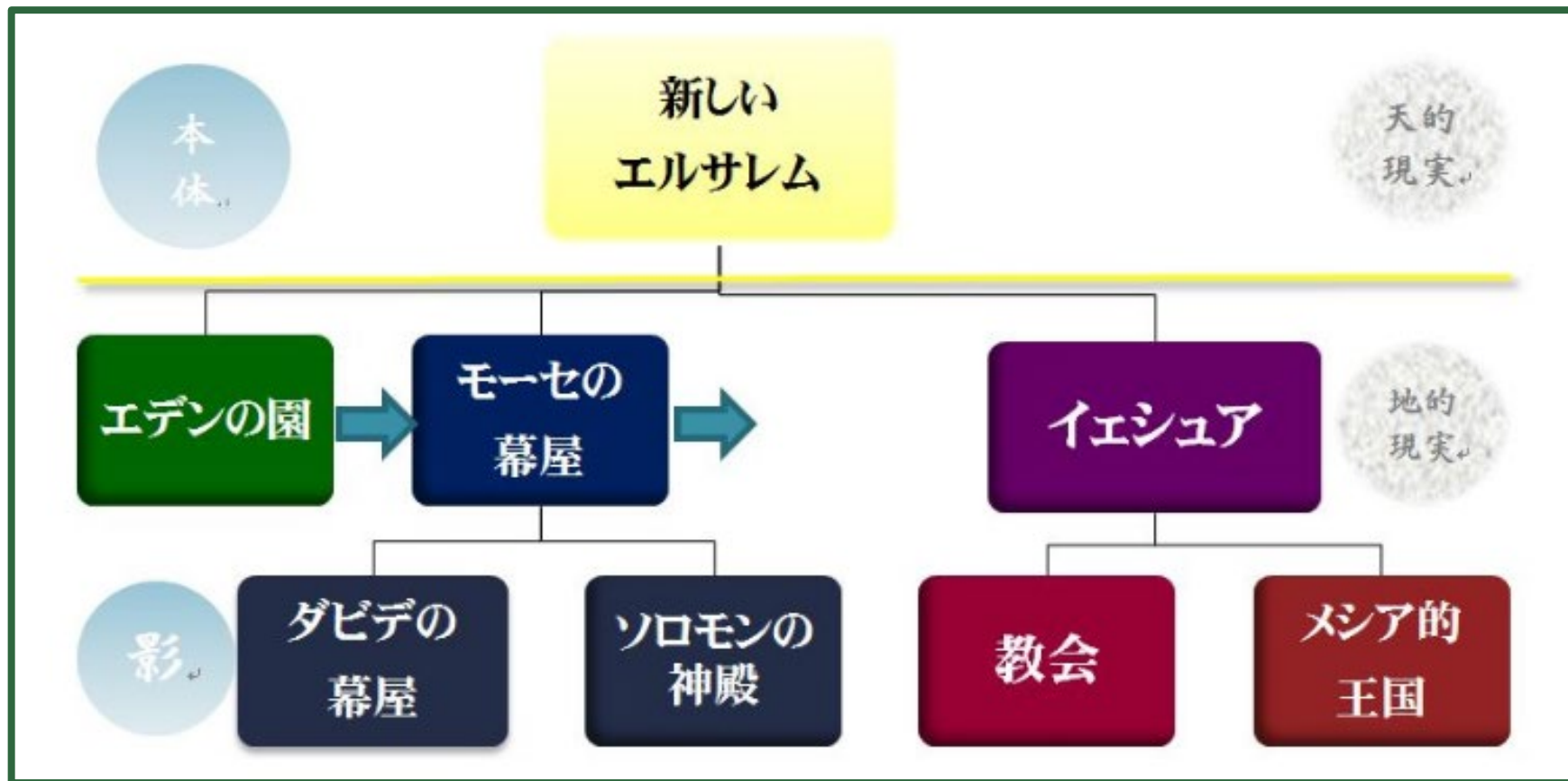
②初めのなかに後のこと、まだなされていない将来のことが
折り重なるようにして(重層的に)告げられているということです。

「・・・こと」とは「神のご計画」のことです。

これを知るためには、たましいではなく、霊の中で悟る必要があるのです。

「エデンの園」の本体は「新しいエルサレム」

- それは「天」にあり、しかもすでに完成されているのです。



1. これまでの流れ ①

- (1) 神である主が地における大地のちりて人を形造り、その鼻からいのちの息を吹き込むことで、人は生きるものとされました。主と人は顔と顔を合わせています。そのとき、**地と天はつながったのです。**
- (2) 神である主はその人を「エデンの園」に置かれ、そこに見るからに好ましく、食べるのに良いすべての木を、そして園の中央にいのちの木を、また善悪の知識の木を生えさせました。それだけでなく、そこに一つの川が湧き出て、園を潤していました。**「木」と「川」は人が食べ飲みするたえです。**
「木」は神(キリスト)のことばを、「川」はいのちの水の流れである聖霊を象徴しています。
- (3) 神である主は人をエデンの園に連れて来て、そこに置かれました。その行為には、**「結婚」と「安息」の概念が含まれていました。**

1. これまでの流れ ②

- (4) さらに、人にはエデンの園を「耕し、守る」という務めが与えられました。その務めとは「王である祭司」としての永遠の務めです。
- (5) 人の務めに対して、ねたみを抱いたケルヴ(全きものの典型であり、知恵と美の極みとされていたケルヴ=ルシファー)がすでにエデンにいたことを想定しました。敵意はエデンの園から始まり、メシア王国の最後まで(歴史の初めから終わりまで)存在します。
- (6) そして、人に対するはじめての命令が語られます。その命令とは、「あなたは園のどの木からでも思いのまま食べてよい。しかし、善悪の知識の木からは、食べてはならない。その木から食べるとき、あなたは必ず死ぬ」というものでした。

1. これまでの流れ ③

- (7) 天からの大いなる光によって神のことばの啓示を完成させた使徒パウロが、「善悪の知識の木」を「罪と死の教え」とであると理解しました。それは「もろもろの霊」である「ストイケイア」(στοιχεῖα)による教え、すなわち、宗教の教えです。パウロはこの教えを「文字(もんじ)による、死に仕える務め」と言っています(Ⅱコリント3:6~7)。この教えによって神の子イエシュアは殺されたのです。
- (8) 「善悪の知識の木」に毒が含まれていたのでは決してありません。すべての木の中から、それだけを限定して取って食べることを神は警告されたのです。事実、神殿ユダヤ教、パリサイ派の律法学者たちはそれだけを食べた人たちです。今日の教会も、ストイケイアとなってしまう危険が常にあります。それゆえに、ヘブル人への手紙の結論は「宿営の外へ出て、みもとに行こうではないか」です。「みもと」とは「イエシュアの所」です。

2. 18節のテキスト ①

【新改訳2017】 創世記2章18節

また、神である主は言われた。

「人がひとりであるのは良くない。

わたしは人のために、ふさわしい助け手を造ろう。」

● 「人がひとりであるのは良くない」ということから、神である主は、人のために「ふさわしい助け手」を造ることが語られています。この箇所にも(2:15の「ラーカハ」と同様)、明らかなブライダル・パラダイム(Bridal Paradigm)が見られます。

※ 「パラダイム」とは「物の見方や捉え方」を意味します。

2. 18節のテキスト ②

エローヒーム アドナイ ヴァヨーメル
וַיֹּאמֶר יְהוָה אֱלֹהִים
神である 主は 言われた また

レヴァアッドー ハーアーダーム ヘヨート ロー・トーヴ
לֹא־טוֹב הַיּוֹת הָאֵדָם לְבַדּוֹ
彼ひとりで その人が いるのは 良くない

ケネグドー エーゼル エッセハ・ロー
אֶעֱשֶׂה לָּוִי עֵזֶר כְּנֻגָדוֹ
ふさわしい 助け手 彼の わたしは(彼女を)造ろう
(彼に向かい合うような) ために
—彼に向き合う助け手—

※ 「ナーガド」 (נֻגָד) は「告げる・知らせる・教える」 (初出は創3:11)

※ 「ネゲド」 (נֶגֶד) は「～の前の、～の前で」

3. 「人がひとりでいるのは良くない」 ①

● 「ひとり」は「バド (בַּד)」で「棒、枝、肢体」を意味します。それらは単独で存在するものではなく、「かかわりを必要とする存在」であることが分かります。それゆえ「ひとりでいるのは良くない」「ロー・トーヴ」(לוֹ-טוֹב)なのです。

● 特に「棒」は、「契約の箱」などを担ぐためのもので、「その棒は箱の環に差し込んだままにする。外してはならない」(出25:15)とあります。ちなみに、契約の箱と棒をつなぐ「環」は「タツバアット」(תַּצְבָּאוֹת)で、「指輪」を意味します。それは信任・信頼の象徴です(創41:42, エス3:10)。

● なにゆえに、神である主が人に「ひとりでいるのは良くない」と言われたのでしょうか。そのことを考えてみましょう。



3. 「人がひとりでいるのは良くない」②

●それは、神である主ご自身が「**かかわりの神**」(交わりの神、相互内在の神)であるからです。地は天の写し、つまりエデンの園は天にあるものの写しです。天におられる神は永遠に交わりの存在であり、御父と御子のパートナーシップは永遠にゆるぎないものです。そしてそのかかわりを支えているのが御霊です。ここに「**かかわりの原型**」があります。

●神における「**いのち**」とは、生物学的な生命の概念ではなく、孤立したり、分離したりせずに、かかわり(愛の交わり)を共有することにあります。創世記1章26節の「**われわれ**」ということばの中に、「ゆるがないかかわり性」(パートナーシップ)として映し出されています。この概念こそ、Bridal Paradigm の基なのです。

4. 「ふさわしい助け手」 ①

● 詩篇1篇にある「アシュレー・ハーイーシュ」(幸いなことよ、その人は)の「その人」とは、イエシュアを指し示していることを以前学びました。「主のおしえを喜びとし、昼も夜も、そのおしえを口ずさむ人」とはイエシュア以外にはいません。そして、その御父と御子のかかわりを「幸いだ」と語っているだけでなく、それを支えている「もうひとつの存在」があります。それが御霊です。つまり、御子イエシュアの人性の歩みを支えた「ふさわしい助け手」とは、聖霊と言えます。

● 人の子イエシュアは聖霊によって受肉し、さらに公生涯に入る時に、天が開いて聖霊が鳩のように降りました。そして天から御父の声が聞こえました(マタ3:16~17)。三一の神の相互内在がここに証しされています。

4. 「ふさわしい助け手」 ②

●御父・御子・御霊のうちに、永遠のゆるぎない愛の「いのち」が存在しています。それゆえ、人は神にかたどって造られたのですから、「人がひとりであるのは良くない」のです。それゆえ、神である主が「人のために、ふさわしい助け手を造ろう」と願ったのは、自明の理です。

●人にとって「ふさわしい助け手」(=向かい合う助け手)とは何でしょうか。このことを教えるために、神はあるものを人のところに連れて来られました。それは、「あらゆる野の獣とあらゆる空の鳥」でした(※)。ところが、それらの中に人は「ふさわしい助け手」を見つけることができませんでした。

※人は「大地のちり」(=土くれ/ヨブ38:38)で形造られていますが、「あらゆる野の獣とあらゆる空の鳥」の場合は「土」(「ハーアダーマー」(חֲמָצְלָה)から形造られています。ちなみに「大地のちり」で造られた人が、やがて宝石や真珠に造り変えられるのです。

4. 「ふさわしい助け手」 ③

【新改訳2017】 創世記2章19～20節

- 19 神である主は、その土地の土で、あらゆる野の獣とあらゆる空の鳥を形造って、人のところに連れて来られた。人がそれを何と呼ぶかをご覧になるためであった。人がそれを呼ぶと、何であれ、それがその生き物の名となった。
- 20 人はすべての家畜、空の鳥、すべての野の獣に名をつけた。しかし、アダムには、ふさわしい助け手が見つからなかった。

● 19～20節にある重要な語彙は以下の二つです。

- (1) 「名をつける」 (「カーラー」 נָקַד)
- (2) 「見つける」 (「マーツァー」 מָצָא)

4. 「ふさわしい助け手」④

(1) 「名をつける」 = 「名づける」 = 「名を呼ぶ」

● 「名をつける」(「カーラー」 $\aleph_{\text{ק}}$)とは、ある存在を固有名詞で呼ぶことを意味します。それは他の存在と区別することを意味します。人が生き物を観察し、その本質、特性、性質、役割などを見定めて定義づけたことを意味します。「名づける」行為には「支配する」という意味合いもありますが、ここでは自分と向き合う存在に「**出会わせる**」という意図をもって、神は人のところに生き物を連れて来たのです。

(2) 「見つける」

● 「見つける」(「マーツァー」 $\aleph_{\text{צ}}$)も、ふさわしい助け手に「**出会わせる**」と訳すことができます。「名づける」(「カーラー」 $\aleph_{\text{ק}}$)も「マーツァー」($\aleph_{\text{צ}}$)も似た意味を持っています。ところが人は「ふさわしい助け手」を生き物の中に見つけることができませんでした。なぜでしょうか？

4. 「ふさわしい助け手」 ⑤

●なぜ人は、神が連れて来た「すべての家畜、空の鳥、すべての野の獣」の中に「ふさわしい助け手」を見つけることができなかつたのでしょうか。

答えは、彼らの中に「霊」がなかつたからです。

●「ふさわしい助け手」(「エーゼル・ケネグドー」^{אֵזֶרֶל קֵנֶגְדוֹ})を、私たちは「女」のことだと安易に考えてしまいます。しかしここで言っている「ふさわしい助け手」とは、単に生物学的な「女」というだけではなく、より深い、重層的な意味を持っています。「助け手」の唯一の条件は霊的な存在であるということです。それは花婿なるキリストにとっての花嫁がそうであると同時に、両者を支える御霊も「助け手」なのです。

●イザヤは、「みどりご」が生まれて「不思議な助言者」と呼ばれるようになることを預言しています(9:6)。その「みどりご」が「力ある神、永遠の父」とも呼ばれるのです。またパウロは、「主は御霊です」(Ⅱコリ3:17)とも言っています。このように、永遠の三一の神の相互内在(=愛の交わり)の中に人が造られているのです。ヨハネはこの交わりを「永遠のいのち」と言っています。

5. 「神は助け」を意味する「エリエゼル」①

● アブラハムが自分の息子イサクの花嫁を見つけるために、最年長のしもべである**エリエゼル**(創15:2)を遣わした話が創世記24章に記されています。イサクにどのような妻を迎えるかはアブラハムにとって大きな問題であり、生涯の最後の課題ともいうべきものでした。アブラハムは信仰をもってエリエゼルを自分の生まれ故郷(=ハラン)に遣わし、そこでイサクにふさわしい妻を探すようにと託しました。このエリエゼル(**אֵלִיעֶזֶר**)の名前が「**私の神は助け**」を意味します。

● イサクにふさわしい花嫁を与えたのはエリエゼルですが、実際にそれを見つけたのは「御使い」(単数の「マルアーフ」**מַלְאָכִי**)です。とはいえ、父アブラハムとエリエゼルと御使いという三の関係、およびイサクとリベカとエリエゼルの三の関係、すべて御父と御子と御霊の三一の神の写しなのです。

5. 「神は助け」を意味する「エリエゼル」②

●イサクとリベカの結婚には、エリエゼルの働きが不可欠です。同様に、花婿キリストと花嫁であるエックレーシアの結びつきにも、御霊の働きが不可欠です。イエシュアは弟子たちにこう言われました。

【新改訳2017】ヨハネの福音書14章16～17節

- 16 そしてわたしが父にお願いすると、父はもう一人の助け主をお与えくださり、その助け主がいつまでも、あなたがたとともにいるようにしてください。
- 17 この方は真理の御霊です。世はこの方を見ることも知ることもないので、受け入れることができません。あなたがたは、この方を知っています。この方はあなたがたとともにおられ、また、あなたがたのうちにおられるようになる(未来形)のです。(原文=「なるからです」)

●それゆえ、花婿なるメシアに対して「御霊と花嫁が言う。『来てください。』・・・」(黙示22:17)と。

今回のまとめ

● 18節で、「人がひとりであるのは良くない。わたしは人のために、ふさわしい助け手を造ろう」と言われた神である主の真意を知ることが重要です。また「あらゆる野の獣とあらゆる空の鳥を形造って、人のところに連れて来られた」のは、その中から、人が「ふさわしい助け手」を見出せるかどうかをご覧になるためでした。しかし人はその中に「ふさわしい助け手」を見出すことができませんでした。その理由を知ることが重要なのです。

● 「ふさわしい助け手」とは、三一の神ご自身の秘義であり、愛の交わりの奥義そのものです。しかもそれを見出すことは神の導きによることであり、神の永遠の賜物なのです。